1、発表力と知能の変化

気が弱い・内弁慶・人前ではっきりものが言えない・人見知り・恥ずかしがるなど、テスト場面での発表力に関係がありそうな項目はあがったグループにも下ったグループにもみられた。

2、情緒と知能の変化

依頼心が強い・自発性に乏しいなどは、上った者二〇人中三人あるのに対し、下った者では五人中四人ともそうで、下がった者の方に多い。±九以内の変動組にも4/13みられるので、特に上がった者の方にこのような傾向が少ないともいえる。知識を広め自分の力を伸すのに、いかに依頼心が邪魔をしているかが分る。

その反面、自己主張が強い・自己中心的・わがまま という面のみられるのは、特に上った者のグループだけで3/20みられ、他には見られない。この性格はさかのぼって幼児期にもみられたとすれば、特に幼児期のテスト場面では、その課題に素直にのらず、持っている力を出さないということにもなりかねない。これと同じ傾向で、短気・粗暴・癇癪持ち・気が強い・怒りっぽい・乱暴・行動が悪いなどの面も、＋のグループに12/20みられ、目立つが－のグループにも2/5、±9のグループにも5/13とみられている。

3、知能の上昇と児童の問題点

動作が鈍い・遅いというのは、＋のグループに5/20、±のグループには1/13みられ、－のグループにはみられない。なぜこれが＋のグループに多くみられるのかは分らないが、動作の遅いというのがテスト場面で児童期では幼児期程には関係のないものになっていると考えられる。その他の神経質・臆病・心配症などがあげられているが、総じて上ったグループの現に困っているものの特徴は、行動・感情のはげしさ・自己中心的・落着きがないなどで ①少しの気分の変化や条件に左右され易い幼児期のテスト結果が満足でなかった。②積極的に自分を表わすことによって日常生活における外界からの吸収が高かったこと。③テスト場面で引っ込みがちでなかったことなどが考えられる。

4 知能の下降と児童期の問題

その反対に、下った者のグループの現在困っていることの特徴は、依頼心が強い・自発性がない・神経質で臆病などが目立ち、これは外界からの知識の吸収においても消極的で、自分を充分に表わすこともやらないという面から、ますます下ってきているのではないかと考えられた。

（大会抄録39—42頁）

精薄幼児のカリキュラム

愛育研究所 青木祥子
足立寿美
小林慶子

愛育研究所家庭指導グループの経験より

私達は精薄幼児一グループ七名を保育してきて、いつもどうしたらよいのか、何をしたら子ども達が喜んでついてくるのか、もっているものを伸してやれるのか考えてきた。家庭指導グループとは家庭との連絡、家庭における子どもの指導を狙いたいと思い名づけられたものである。幼児の生活は両親特に母親の膝で暮すわけであるから、子どもだけを切り離して三、四時間幼稚園の縮刷版のようにやっても効果がないので、母親も一しょに入って先生のやるところをみて貰うが環境に慣れた頃（一月後）当番制で二人ずつ先生の助

手になってもらう。子ども達によりよいグループでの生活経験をさせる為にどんなカリキュラムを持ったらよいのかを考えていく為に今までしてきた事をまとめてみたいと思う。

保育内容の問題点

子ども達の一日の生活を追ってそれをわけてみると五領域が考えられる。

一、生活指導　二、音楽　三、絵画その他の製作　四、運動　五、社会性である。以上の五領域は実際の保育場面では時間的に区切られたものではない。社会性をリズムや歌を通して指導する場合…挨拶、返事など…もあり、絵をかく時に紙をくばったり、クレヨンを出して来たりなど生活指導の部分も入ってくる。

ここで特に生活指導の重要さについて述べてみたいと思う。生活指導で取りあげるものは、着衣、食事、排泄、清潔（手洗い）、整理である。朝来たらスモックを着ることになっているのに鞄を投げだして遊んでいる子、帽子もとらずフラフラ立っている子、大部分は先生に催促されるかつかまるまで着ようとはしない。ロッカーに鞄をかけて、スモックを持ってくること、スモックを羽織る、袖を通す、ボタンをとめる、と順序を追って一人ずつ指導していく。入園の当初は常に母親が、挨拶したの？・鞄とりなさい　とことばで催促し手をそえ、子どもが何もしなくてもすむ状態であった。ここに来るまでの子ども達の生活は自分のやりたいようにするか、おとなのやりよい方法で生活してきたのだからそれを改善するのは不器用で注意力がなくて新しいことの苦手なものにとっては容易ではない。また親はその子に対して他の兄弟姉妹に対するのと異って、代弁者となり過保護的な傾向が強く、子どもの物事に対する意欲を失わせ依頼心を強くしている。こうした中で教師は子どもと良い結びつきをつけて、子ども達が家庭指導グループという集団の中に入れられた為におこっている緊張をときほぐし、新しい生活の方法を規制して、これを反復練習して子ども自身の習慣、生活技術として身についたものとしてやる。これらの事柄は私達の生活で最も基本的なものでこの一つ一つができなければ生活の領域を拡げることは難しいと思う。更にこの子ども達は遊ぶのが非常に下手である。生活指導の次には遊びに導入する。子どもだから遊ぶのはうまいとは限らないと知らされた。MAで三才の子でも、はじめは人のつくったものをこわす方が多く、フラフラしたりボンヤリした子が大部分だった。だから最初は教師の手によって積木で東京タワーをこしらえたり、お人形ごっこの場面をこしらえて子ども達を誘うようにする、遊びというと教師の指導外のように感じるが、子ども達全体を独り遊びから先生対子ども、先生対子ども達、子ども対子ども、皆で集ってと集団化していく為には比較的能力の高い級（ここではIQ50前後）でも半年かかる。また遊びの種類も少なく、創造や発展も教師が中心にならないとなかなか生れてこないのである。

私はなるべく全身を動かすようにしたいとマットでころがしたり、でんぐり返し、逆立あそびをさせたり、歩かせたりした。運動的な要素を含めて遊びを考え身体の柔軟性を養うようにした。こうしたあそびの中で自分以外のものを意識させ、のぞましい対人関係をつくっていくのである。

音楽、絵その他の製作は、それ自身の成果を期待するのでなく、感覚訓練として行なうものといえる。しかし訓練だからと特別な事はしなかった。子ども達の絵は錯画の段階で半紙の大きさのものに一杯に画くのは担当難しい状態である。楽しんで一生けん命いろいろなクレヨンでぬるようにする。色、紙を使っての細工指導は困難

で出来るだけ大きな材料を選ぶようにした。

精薄幼児のカリキュラムを考える時、子ども自身の成長・変化は非常に遅々としたものなので、子どものテンポに合わせる必要がある。また新しいものをたくさん与えるより、何回かくり返し与える必要がある。子どもが自信づけられるような容易な材料を選ぶことである。

この生活指導グループ時代は遊びの生活でよいと思う。絵をかくことも、運動・音楽も遊びである段階から出発する。簡単ながら今までした事をまとめてみたが、子ども達は個々別々の能力や人格を持ちその指導も細くわかれる必要はあるが、最少限共通してしなければならないものもあり、それを一つにまとめていきたいと考えている。

（大会抄録43—44頁）

精薄幼児の評価について

愛育研究所　足立寿美
小林慶子
青木祥子

精薄幼児のカリキュラムの中で述べて来た内容を持つ保育を行ない、その中でこのグループの子ども一人ひとりが、どのように行動し、変化をしていくか、その姿をとらえ、評価してみた。

まず教師の日誌の中から、グループ一人ひとりの子どもについての記録を抜き出し、月別の行動状況を一覧表につくってみた。前もって観察項目を決めていたわけでなく、記録自体、内容的に不十分であるが、或る程度、子どもの成長のあとをたどることが出来るようである。また、グループ参加最初の昨年六月と、この三月の行動状況を取り上げ、比較検討を行ない、子どもの変化、教育の効果をみてみた。

次に、こうした変化を、全体的にとらえる為の評価を試みた。とりあげた内容は、生活習慣では〝食事〟〝衛生〟〝後片付け〟〝排泄〟〝着衣〟の五つであり、社会性では〝返事〟〝朝の挨拶、帰りの挨拶〟〝グループへの参加〟〝友達への関心〟の四つである。これらの内容は、我々が精薄幼児の教育の中で、最も基礎的なものと考えて力を入れている点である。

この内容を、それぞれ四段階に分けた。そうして子どもの具体的な行動をもとにして、段階の基準を作り、各子どもについて評価をしてみた。

基準としての具体的な状況を、生活習慣の中の食事を例にとって説明すると、

〔第一段階〕他のことをしている。弁当に関心を持たず食べようとしない。スプーンが使えない。〈第二段階〉食べることもあり、残すこともあり一定しない。スプーン使用可能。食事中動きまわることなく、大体、すわっている。こぼす量多い。〈第三段階〉スプーンと弁当を両手で使う。一人で大体食べられる。〈第四段階〉食事の挨拶が出来、大体こぼさないで食べられる。また、食後片付けをしようとする。以上である。

この我々の家庭指導グループでの目標は第三段階であり、この目標に達した子どもは、年令を考慮した上で、上のグループに移している。この評価は、全体的な子どもの変化を大体摑むことができ、今後の指導への一つの目やすとしても利用出来た。

以上の試みより、精薄幼児においては、出来るだけ早期に、こう